

弩真ん中を知る⑥

三月十五日

兎玉雨子

先の東日本大震災をテーマに、都市や同じ国に住みながらも生じた「痛み」のギャップ」そのものを描き、私なりに何か伝えられたらと思います、この作品を掲載することに至りました。

あくまで作品中での世界ですが、読んでいただく方の中には、不快に感じられるであろう表現があるかと思えます。特別な思想や意見ということではありません。一家の表現の方法のひとつと、なにとぞ作品のご理解をよろしくお願い申し上げます

よく眠った。眠り過ぎて眩暈がした。からだじゅうは重く、そしてやるべきことを失う。というかやるべきこと、やりたくない。したいことだけしていただく、明日は我が身な毎日に胡坐をかけるぞって、人間以下の倦怠感が喜ぶ。人間以下というのは人間も入るから、いい表現だと思う。

あれから一週間も経っていない。あれから時間はさほど進んでいない。公共の場が多すぎる。多すぎて、追いつけない。ここでもいい顔あつちもいい顔そつちもいい顔、笑顔の安売り美辞麗句の大決算。とりあえず昼間に起きて、録画した深夜アニメを観ながらイフオーンからみんなの《ネットでの顔》を視させていただく。実際はよく知らないくせに、雨が降ればそれは有害物質だとかどこかのなにかが爆発したとか、規模が自分の両の手の平じゃあ抱えきれないものを、必死に持ち上げて見せびらかす。喚起のつもりかもしれないけれど、子どもの私たちはそんなことできるわけない。ただの情報持ち自慢だつて。それかあれっしょ、推薦入試のための、活動欄のところに書きたいがためのその行動でしょ。と、硬いポテチを噛み砕いて、塩味に舌を麻痺させる。

振動も眩暈も、普段健康的に生きていれば感じ得ない現象だ。非日常に触れるために、わざと自分から遊園地に行つて長蛇の尻尾になりながらもアトラクションに乗り込む。

あんたたちはこの事変さえも、アトラクションなのかよ。

正義の私が少し毒づけば、昨日大活躍したビッチちゃん達は反省する。うん、ちがうの、ごめんね本当に。私を穢してごめんね。そうじゃなくて、ちがうの。だってそこに好きな男の子がいたら、私達黙つてられないようにプログラムされちゃつてるの、悪気はないの、ごめんね。ごめん…。そうやってさあ、プログラムとか言っちゃつてさあ。あのねなんで私がいるかわかるの？バツカじゃないの。私があんたたちを抑えつけるためにいるんじゃない。

あつこれ、アノミーってやつだ。こんだけ平和で大きな出来事ももう無い

と思われていたけれど、アノミーマジで来たわ。こわ。激動ってやつだ。こわ。みんなおかしくなっちゃってる。私もこんだけ混乱しちゃうってる。なのに野島はわりと普通に、お花見のことなんか考えてたわけか。こんな騒がしく何かと意見を発信しなきゃしなきゃって強迫されてる中でお花見とか予備校始まる始まらないしか言わないで買物に出かけちゃう野島すごすぎ、野島こそ救世主。野島に愛されたい。野島を愛したい。いや愛とかそんな大げさじゃなくていいから、野島と近くなりしたい。

じゃなくて予備校。春季講習。

さすがに昨日さぼったから行かなきゃって、昨日詰めたまんまのリュックからポーチを取りだして、折りたたみの大きめな鏡に向かってまだ何も施されていないいまちな自分の顔と向き合う。失敗続きだけじゃなくて、ちゃんと反省して予防策を考えたんだ、まともに化粧しないからすぐに帰っていや〜とか甘えが出る。外に出るぞって決めたらちゃんと外出モードの自分を作らなきゃ。しっかりファンデーションから決めていかなきゃ。鏡に向かって、順序を踏んで素地から出来得るなりたい私へと近付けるんだ。粉で肌の小さな凹凸まで隠して、眉毛を少しだけ長くして、そしてやっぱりマスカラとアイライン。真つ暗なマスカラでまつ毛をなるべく長く、どこへにも繋がらないのに届くように長く長く引き伸ばす。そこまで大きくない目を、アイラインで嘘でも大きく見せる。テレビや雑誌にいるような、本当はなれない子だってわかっていてもなりたいと願う。鏡の向こうの私は、私が作りあげた理想に最も近い私。みんなが知っている自分の顔さえ、本当はよく知らない。見慣れた私は、違う私。でもそうしなきゃ、とても人前には出られない。きつと憧れに追いつく努力を怠ると、精神的にも甘えがにじみ出る。厳しくストイックに行こう。

呑気にあたしのおっぱいが〜とか言ってるアニメを消して、アイフォーンの中の野島のデータを探す。今一番確実な連絡先っていうのは、住所でも何

でもなくてメールアドレスと携帯電話の番号なのだ。もうひらがなも漢字も入る余地なんてない。窓から見える痛々しく腫れあがる桜の蕾を見ながら、野島に電話を掛けてみる。一度目は回線が混雑していて繋がらなかった。なんだか、講習の休講よりも電車の遅延よりも、そして緊急地震速報よりも、アノミーの渦中に放り出された実感を感じる。想っている人にさえ、届かない。なんて寂しいことなんだろう。初めて、被災した人たちへ意識が向かう。好きな人にも、帰る場所へも、眼に視えない電波でさえ繋がらないなんて、それを私が要らんことばかり考えていた間にもそんな孤独に突然放り出されちゃうなんて、なんとかできるわけがないに私もなんとかして協力してみたんだとか、思っちゃう。人の繋がりがって、簡単になったからこそあっけなく断たれちゃうんだ。昨日の私みたいに偶然を仕掛けたり期待したり、もっと原始に戻るべきなんだって。ってわかっていても、なんとなくもう一度、野島に電話を掛けてみた。誰かを救うためじゃなくて、すぐくすぐくわがままで自分勝手な意図でしかなかったんだけど。そうしたらちゃんと繋がったんだ。

「もしもし？」

「もしもし野島」

「どうしたの」

「……いや、あのさあ、四月に、葉子たちとお花見やるんだけど…野島も来ない？みんなでやらない？」

「おっいいいね、葉子のゴツゴツ岩肌ブス顔いじってやろーぜ」

「ひっどー。まあ確かに葉子ブスだけど」

「ブスキャラの頂点」

「それ葉子の前で言えんの？」

「言ってる。あのブス、うつるせえくってぶりっ子すんだけど全然かわいくない、ブスのぶりっ子ほどヤバイもの無いし」

「言うねえ野島」

会話が弾む。ごめんね葉子、本当にブスだとは思ってたけど、これ悪口じやなくて、本当に洒落にならないブスは弄れないからね、いい意味でブスって意味だからね。ゆるして。

「斎藤はこれからなんかあんの？」

「うん、予備校」

「そっか、頑張れ」

うんざりしてもこれでもかってぐらい、耳を塞いでも目を閉じても言われる「ガンバレ」の文字さえ、野島の声でなら、何だって頑張れちゃう気がする。うん、頑張るよ。私頑張るよ。だから私が頑張れない時はいつだって野島、頑張れって言って。野島の頑張れでしか頑張れない。

「がんばる」

誰も見ていないのにへらっと笑う。この桜の蕾が咲いたら、次の約束や誘い文句はどうしよう。まだ咲かないでね。まだ我慢して。咲くまで待っている間が一番愉しいから、まだもうちょっとだけ。

なんだか色々考えすぎちゃっていたけど、やめよ。だって桜はいつまでも蕾ではないし。私が反旗を翻したりなんか、しなくていい。なるようにしてなる。放棄してすみません。だけど、欲しいと思っ手伸ばしても届かないのに、欲が薄くなるとやってくるもの。知りたいと躍起になると周りが見えなくなる。もっとう、広い視野で、そう。さようなら。

電話を切り、残りのポテチを一気に口に流し込む。グロスのゴムっぽい味に混ぜたしよっぱい口の中をメロンソーダで中和させようと思って冷蔵庫を開けても、もう一本も残っていない。ああ帰りに買わなきゃあと考えたとき、私は少しだけ、世界中の弩がつくほどの核心に触れた気がした。